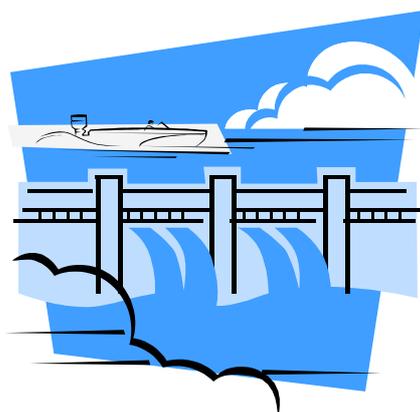


日本電子キーボード学会設立大会

報告書

目次

日本電子キーボード学会設立趣意書	2
日本電子キーボード設立大会までの経過/設立大会プログラム	3
ごあいさつ 下八川共祐（昭和音楽大学理事長）	4
基調報告 音楽文化における電子楽器のもつ意義と課題 吉田泰輔（国立音楽大学理事長）	5
基調報告 日本電子キーボード学会の必要性とその役割 高萩保治（東京学芸大学名誉教授）	6
研究発表 中国における電子オルガン音楽の現状と課題 朱 磊（上海音楽学院現代楽器音楽科主任・副教授）	8
研究発表 M.L.（ミュージック・ラボラトリー）の学校教育における可能性 大串和久（埼玉県立鴻巣女子高等学校教諭）	10
研究発表 小学校における電子オルガン楽器を活用した効果的授業 初山正博（東京都世田谷区立上北沢小学校教諭）	12
研究協議 日本電子キーボード学会設立準備委員および参加者による研究協議	14
[編集後記]	18



「日本電子キーボード学会」設立趣意書

今日の音楽のすばらしい発展は、多くの国々の技術者によって作られ伝えられてきた楽器と、それらの音資源 (sound resources) に触発されて様々な創造や表現に努めてきた作曲家や演奏家、および著しい広がりを見せているメディアの貢献が大きいのといわれています。これらの中にあって日本の誇るハイテクノロジーの結晶ともいふべき様々な電子楽器の生産額は、アコースティック楽器のそれを凌駕するようになり、音楽家の諸活動のみならず、幼児から高齢者に至る学習者「みんなが」「いつでも」「どこでも」行える「様々な音楽活動」、すなわち生涯学習の一環としての音楽学習の展開にも貢献して、これらの人々の音楽的表現意欲を増大し、その活動の輪を拡大してきております。

既に周知のとおり、最新の電子キーボードは、コンピューター機能を内蔵してバーチャルサウンドを持ち、未来を指向したサイバーキーボードとも称され、優れた音の多彩なサンプリングなどを生かした「創作機能」「アンサンブル機能」「教育的機能」を持っております。それらの機能を十分に活用することにより、新しい響きを追求し豊かな音楽表現を求め、多様な音楽活動のさらなる活性化に貢献しています。特に、国内や海外における国際的なイベントに於いて、「アンサンブル機能」を活用してアコースティックな楽器との共生をはかり、協奏曲やオペラ、さらには民族音楽の分野さえも、電子オルガンによるオーケストラ的協演という形態を生みだし、文化的に多様なプログラムによる演奏が提供されております。

拡大された音楽教育の現場に目を移せば、この電子キーボードの多音色・多機能という特色に着目し、初等教育が

ら高等教育、さらには生涯学習に至るまで、音楽表現・音楽創りのための発展的な学習への活用が行われるようになってきております。特に専門教育に於いては、12の音楽大学、21の音楽短期大学、26の音楽高等学校に、電子キーボードを代表する電子オルガン関連の学科が開設され、この楽器の効果的な指導法の開発或いはスコアリーディング方式による新しい響きや豊かな音楽的表現を求めて、専門教育およびアマチュア音楽活動などの活性化に大きく寄与してきています。また、演奏分野に於いては、電子オルガンのオーケストラ的協演によるピアノ協奏曲やオペラ、ミュージカルなどの上演が、コンサートやまちづくりの一環として全国的に行われ、一つの社会現象にもなっています。

しかしながら前記のような活動は、どちらかというと個別に行われてきており、今後、これらの意欲的な研究・実践や情報などの交流を、より活発に展開していく必要があります。さらには、新しい響き、豊かな音楽表現、多様な音楽創りのための電子オルガンやM.L.(ミュージック・ラボラトリー)における電子ピアノや一段電子鍵盤楽器の効果的活用方法を、作曲家、演奏家、指導者に楽器の製作者なども加わった広い視野から、協調的に研究推進することが必要となってきております。私たちは、生涯学習社会を迎えて学習ニーズの多様化への対応を迫られている小・中・高校の教育及び専門教育やまちづくりにおける望ましい音楽学習活動の活性化に向けて、多くの関係者によるグローバルな情報交流も含めた総合的な研究の場として、「日本電子キーボード学会」の設立を提唱するものであります。(2004年10月2日)

日本電子キーボード学会設立準備委員(順不同)

吉田泰輔：代表(国立音楽大学理事長/音楽学)

下八川共祐(昭和音楽大学理事長/オペラ制作)

高萩保治(東京学芸大名誉教授/音楽教育)

出田敬三(平成音楽大学学長・教授/作曲・指揮)

中村 誠(浜松学芸高等学校学校校長/学校教育)

小川秀樹(広島音楽高等学校学校教頭/管楽器・指揮)

遠藤雅夫(日本現代音楽協会理事/作曲・M.L.)

野口剛夫(昭和音楽大学講師/音楽学・指揮)

森松慶子(国立音楽大学講師/音楽学・電子オルガン)

赤塚博美(洗足学園音楽大学講師/作編曲・電子オルガン)

海津幸子(昭和音楽大学・洗足学園音楽大学講師/ピアノ・電子オルガン)

柴田 薫(昭和音楽大学・聖徳大学講師/音楽教育・電子オルガン)

大串和久(埼玉県立鴻巣女子高等学校教諭/音楽教育・M.L.)

安藤恭子(鶯谷高等学校学校講師/音楽教育・電子オルガン)

初山正博(世田谷区上北沢小学校教諭/音楽教育・電子楽器)

阿方 俊：事務局(昭和音楽大学講師/音楽教育・電子オルガン)

「日本電子キーボード学会」設立大会までの経緯

昭和音楽大学電子オルガン第1回定期演奏会（03年9月）終了後、下八川共祐理事長より阿方俊講師に、電子オルガン奏者や教育者がより高い社会認知を得ていくためには、学会を設立して研究成果を発表していく必要があるのではないかという趣旨の提案があった。

吉田泰輔/国立音楽大学理事長と高萩保治/東京学芸大学名誉教授が趣旨に賛同。2003年12月、学会設立準備大会小委員会（代表：吉田泰輔/国立音楽大学理事長、下八川共祐/昭和音楽大学理事長、高萩保治/東京学芸大学名誉教授、事務局：阿方俊/昭和音楽大学講師/東成学園内）が設けられた。

1. 学会設立準備小委員会

- ・2004年1月より 月1回程度の持ち回り会議を国立音楽大学、昭和音楽芸術学院などで行い、学会設立の基本的考え方および学会設立大会準備委員の検討と依頼を行った。
- ・6月1日および9月23日の午前 小委員会を国立音楽大学および昭和音楽芸術学院で開催。

2. 学会設立準備委員会

- ・2004年9月23日 第1回学会設立大会準備委員会（昭和音楽芸術学院 出席者：吉田、下八川、高萩、野口、安藤、初山、阿方）
- ・2004年10月2日 第2回学会設立大会準備委員会（昭和音楽芸術学院 出席者：吉田、下八川、高萩、出田、中村、遠藤、森松、赤塚、海津、柴田、大串、安藤、初山、阿方）

3. 第1回研究大会開催実行委員会

- ・第2回学会設立大会準備委員会において、学会設立準備委員を基に第1回研究大会開催実行委員会（代表と事務局は継続）を結成し、05年に第1回研究大会の開催とそれまでに必要な諸準備を行うこととした。

4. 学会設立大会

- ・2004年10月2日 学会設立大会（昭和音楽芸術学院）を開催し、第1回研究大会に向けた内容を協議する。

日本電子キーボード学会設立大会 プログラム

ごあいさつ

下八川共祐(昭和音楽大学理事長)

基調報告

音楽文化における電子楽器のもつ意義と課題
日本電子キーボード学会の必要性とその役割

吉田泰輔(国立音楽大学理事長)
高萩保治(東京学芸大学名誉教授)

研究発表

中国における電子オルガン音楽の現状と課題 朱 磊(上海音楽学院現代楽器音楽科主任・副教授)
M.L.(ミュージック・ラボラトリー)の学校教育における可能性 大串和久(埼玉県立鴻巣女子高等学校教諭)
小学校における電子楽器を活用した効果的授業 初山正博(東京都世田谷区立上北沢小学校教諭)

研究協議

電子キーボード学会設立準備委員および参加者による研究協議

コーディネーター：阿方 俊(昭和音楽大学講師)

司会・進行：大串和久(鴻巣女子高等学校教諭) 柴田 薫(昭和音大・聖徳大講師)

ごあいさつ

昭和音楽大学理事長 下八川 共祐



本日は、「日本電子キーボード学会」設立大会にご参集いただきありがとうございます。

私は音楽教育の専門家ではありませんが、会場提供者として、また本学会発足に関った一人としてごあいさつ申し上げます。

昭和音楽大学は、他の音楽大学に比べて電子オルガンコースの設置や M.L.（ミュージック・ラボラトリー）の取入れが比較的遅かったのですが、ようやく昨年（2003年）から電子オルガンコースが定期演奏会を開けるような段階になって参りました。

1998年に電子オルガンコースを開設してから今日まで、ハイブリッド・オーケストラやバイキーボードといった電子オルガン音楽や教育への新しい考え方を聞かされてきました。次のステップに向けてこの楽器が大学や社会の中で広く認められていくためには、学会など社会的に認知をされている機関において、積極的に広く議論していく必要があるのではないかと思います。担当の先生に学会の有無を尋ねたところ、この種のものはまだ無いという返事が返ってきました。

そこでクラシック音楽と共に電子楽器にも先進的に取り組んでいらっしゃる国立音楽大学の吉田先生や広く音楽教育学会に関してこられた高萩先生に電子キーボード教育に関するご相談を申し上げたところ、学会設立に快くご賛同いただくことができました。その後、浜松学芸高等学校長の中村 誠先生や平成音楽大学長の出田敬三先生をはじめ学会設立準備委員の方々のご了解を得て、数回の実行委員会を開き、本日の設立大会開催の運びとなったわ

けです。

現在、日本の高等教育機関における電子オルガン教育をみると、電子オルガン関連学科が音楽大学の3分の1、短期大学においては3分の2、音楽高等学校では4分の1に設置されています。そしてこの電子オルガン関連学科開設の傾向は、日本のみならず中国をはじめとしたアジア諸国の音楽大学でも取り上げられはじめています。また演奏面においても、今や電子オルガン演奏によるオペラやピアノコンチェルトはめずらしい段階ではなくなり、演奏の質が問われる段階になってきています。すなわち、この楽器は今や教育と演奏の両分野で無視できないものになってきていると申せましょう。

一方海外に目を転じると、数年前にアメリカのノースウエスタン大学などで M.L. が有効に活用されているレッスンを目にした時、これは将来の音楽指導法のひとつであるという実感をもたされました。また、ジュリアード音楽院のシンセサイザースタジオや英国ロイヤルアカデミーの M.L. を活用したレッスンなどの実際例を聞くと、本学会のような活動は国際的にも意義のあるものと思われる。

本日発足しました「日本電子キーボード学会」が、音楽教育関係学会や研究会に加え楽器産業界の方々の賛同も得ながら、ここにご参集いただいた先生方のご尽力によって、これからの日本の音楽文化発展に寄与していくことを心から願っております。

ありがとうございました。

音楽文化における 電子楽器のもつ意義と課題

国立音楽大学理事長 吉田 泰輔



基調報告を始めるに当たって、まず私の基本的スタンスをお話しします。八月の「全日本電子楽器教育研究会」でも述べたことですが、私は電子楽器あるいは電子キーボードの将来に危惧の念、あるいは危機感を懐いております。その理由として、教育の在り方、表現実践に携わる人の意識、楽器の在り方の三つを挙げたいと思いますが、本日のところは、一つの話題に絞りたいと考えます。

さて、国立音楽大学にかつて、郡司すみという教授がおられました。この方が、以下のような概念を提唱しておられました。即ち、「楽器は、音楽や文化の情報を伝えるメディアである」というものです。したがって、逆に、楽器の在り方を研究すれば、音楽はもとより、それを担う人間や社会の在り方が見えてくる。あるいは、各楽器はそれぞれ、音楽や人間の在り方に関する固有の情報を所持している、というものです。ピアノにはそれをピアノ足らしめている固有の属性・機能があり、それを媒体として表現される固有の音楽や文化がある。こうした概念を氏は、「楽器メディア論」として体系化されようと試みておられました。氏の発想の出発点には、クルト・ザックスの思想があると思いますが、これを楽器メディアという観点を介して、問い直しをしようと試みられたものと、私は推測しております。

ところで、こうした観点から、電子キーボードの世界を眺めてみますと、率直に言って、それが楽器たり得ているか、という点に疑問を感じるのです。たとえば、電子オルガンにはすでに半世紀近い時間が経過し、揺籃期にあるとは言えないのですが、それ独自の文化や情報を発信させているか、あるとすれば、それは一体どのようなものか、そうした問を提出したくなる。そしてこれが、私がこの学会に係わろうと考えた原点と言えるものです。もし電子オルガンが楽器でなければ、それは道具あるいは電化製品ということで、陳腐化させ直ぐに買い換えを必要とさせるものであり、需給の循環に連動しない如何なる活動も必要とされず、真剣な研究に値するとは思えないのです。

電子キーボードの中でも最も普及している電子オルガンは、ご存じのように、アイデアの元祖は欧米にあるとしても、その後の展開では日本が中心となって進められてきたものであり、これがもし、先ほど述べた楽器メディアとしての存在価値を持つことになれば、それこそこの国から発信された文化の一つとしてグローバルな意味を持つことになる、こう考えました。ところが、その後の経過は期待・希望を裏切るものだと考えています。

私は、この楽器の教育と間接的に係わった人間として、電子キーボードがまだ楽器メディアの域に達していないなら、そうなるために何が欠けているのか、どうすればそれが可能になるのかを見きわめたいという思いがあり、今回の学会設立の趣旨に賛同しました。この新しく設立される学会で、私自身が現在懐いている関心は、二つあります。

一つは、教育、それも特に、学校教育(初等中等教育)における電子キーボードの利用です。この分野への展望がなく、ただ徒に、電子キーボードの専門的音楽人を育成するプログラムにのみ関心を払っていけばこの分野での次なる展開は見えてこない、と信ずるからです。

もう一つは、楽器そのものに対する関心です。私は、これまで度々電子キーボードによる表現の場に接してきましたが、残念ながら、心から共感できる音楽に出会う機会がとても少なかったという記憶があり、これは私自身の感受性の鈍さもあるのでしょうか、それにしても思いますのは、先ほど触れた楽器メディアとしての力があるなら、なぜもっと訴えるものが作られないのか。それは機能の問題というより、音そのものに原因があるのではないのか、との疑問があるのです。この疑問を突き詰めていきますと、単に音響学や美意識の問題だけでなく、聴の心理や大脳生理の分野にまで踏み込むことになるでしょうが、望んでいるのは、特に若い世代が、音というものにどういう感性をもっているのか、特に電子音についてはどうなのか、これを具体的な検証データをもって論ずるような場が欲しいということです。そうした研究が進んで、問題の根幹にあるものが、電子音固有の事柄なのか、あるいは創造性の貧困というような深いテーマに行き着くのか、それはこれからの課題となるでしょう。この世紀に、電子キーボードが少しでも多くの文化遺産を残せるように、研究しその成果を活用していくための足場として、この学会が成長できれば、素晴らしいことだと考えております。

日本電子キーボード学会の 必要性とその役割

東京学芸大学名誉教授 高萩 保治



近年、学校の内外においてこれまで考えられないような様々な事件が起こり、心の教育の必要性が強調されるようになり、感性を育む音楽教育への期待が高まっている。人間生活の営みには、言語・非言語の二つのコミュニケーションがあり、言語コミュニケーションが不可欠であることはもちろんであるが、音楽などの非言語コミュニケーションも人間生活には潤滑油のような存在であり、特に感性を育むうえではたいへん重要であることを思うとき、音楽教育のありかたに関しても思い切った発想の転換が必要であると感ずる。

最近の諸科学の発達によって、乳幼児の成長、特に言語の習得過程の研究が進んできたが、これらからも音楽科における基礎・基本の指導のあり方への重要な示唆を読み取ることができる。人間のコミュニケーションの基礎は、愛情に支えられた母親の語りかけや、子守歌などによる歌いかけにより、乳幼児の表現能力が誘い出されることによって形成される。乳幼児の言語表現のラーニングモデルは母であり、歌は文章の句読点を示すようにフレーズを把握し易いので、音表現のラーニングモデルである。ところが、歌のフレーズから問答の感覚を把握し、音でコミュニケーションできるようにすることが、音楽の基礎・基本であるという考え方が日本の音楽教育に於いては欠落しているために、子供の創造性が育まれてこないのである。

そもそも国・社・数・理のような教科では、子どもの外にあるもの、すなわちそれぞれの学問領域で規範化された知識や技能を伝達・修得することが基本とされている。しかし、感性に主として働きかける芸術教科では、子どもの内にあるものを、自身で感じ、表現することで、価値や意味が形成されることが大切である。そこで音楽科においては、ラーニングモデルといわれる歌を学習しながら問答の感覚を把握し、身体や道具を使って音でコミュニケーションし、成長発達につれてその道具を変えたり増やしたり、問答の

長さを変えたりパートナーを増やしたりして、生きる喜びに連動するような（音のアドベンチャーができるような）音楽の時間とすることが求められよう。それこそが、生涯にわたる学習に繋がりが得るものなのである。

現代はI.T.時代と言うよりはむしろ、コミュニケーションの重要性が強調される、I.C.T.（情報・コミュニケーション・テクノロジー）時代と言われる。音楽科教育もI.C.T.時代に相応しく「音でコミュニケーションする」をキーワードとして、単に教科書などの歌を教える「唱歌科的な時間」から脱却して、「仲間とさまざまに音でコミュニケーションし、自己表現を豊かにし、音楽する喜びを共有する時間」へと、発想の転換が求められているのである。音でコミュニケーションするには、昔から声はもちろんのこと、音の出る道具もよく使われ、教育現場でも打楽器から始まり、旋律楽器も加えて即興的に音でコミュニケーションすることが奨励された。ドイツでは、カール・オルフによるオルフ・メソッドにおいて、そのような音楽表現や音楽創りを効果的にするために、オルフ楽器という独自の教育用楽器が開発されたのはよく知られたことである。

今日では、ハイテクノロジーにより多音色・多機能を持つ電子キーボードが多数開発され、広く使われている。しかも日本では、ファミコンなどに親しんだ児童には容易に操作できる卓上型一段鍵盤のものから、本格的な教育や演奏用の三段鍵盤のものまで開発されている。これらの電子キーボードは、メニューボタンによって音色や微妙な表現などを選択できるようになっており、演奏者が様々な表現を工夫できるようになっている。

とはいえ、どんなに優れた性能の電子キーボードでも、演奏者がこれを使いこなさず、豊かな音楽表現を生むのでなければ意味がない。そこで、演奏法の研究及びその効果的な指導法が、重要な研究課題となってくる。また、電子キーボードはソロだけでなくいろいろな楽器とのアンサン

ブルに対しても可能性を秘めた楽器である。演奏者はただ単に演奏テクニックの習得に努めるだけでなく、それを支える音楽性を高めるような、包括的な音楽学習を行わなければならないであろう。

したがって、総合的なこれらの情報を交換したり、あるいは協同して研究する場としての学会を設立し、専門教育や学校教育さらには生涯学習の一環としても、理論と実践を整理し、発展させる必要があると考える。

近年では海外での例は挙げるまでもないが、日本では専門レベルでも市民レベルでも、合唱や協奏曲での伴奏、オペラ・ミュージカルなどに、電子キーボードが様々に活用されてきている。さらに、アコースティックな楽器も加えて協演されるなど、電子キーボード単独での演奏の場合とは異なる新しい響きや表現の追求も行われている。2001年10月に東京芸術劇場で開催された国際音楽評議会（ユネスコの音楽部門を担っている）第29回世界大会でのコンサートでは、電子キーボード5台で交響曲、またそれにアコースティック楽器を加えたアンサンブル、すなわちハイブリッド・オーケストラで、オペラ歌手によるアリアが演奏され、多くの国々からのプロの参加者に、“日本の電子キーボードは新しい芸術表現の可能性を秘めた楽器である”との印象を与えたことは、記憶に新しいところである。

音楽大学での教育現場でも、電子キーボードは有効である。たとえば、ピアノ専攻生は一般にアンサンブル経験が乏しく、学習するレパートリーが狭くなってしまうことへの対策として電子キーボードを使えないかということが挙げられる。すなわち、ピアノ専攻生に電子キーボードの学習の機会を提供し、アンサンブルや、他のアコースティック楽器との合奏を体験させ、音楽学習のレパートリーや音楽表現の拡大を期待できる。そして電子キーボードは、音によるコミュニケーションを仲介し、演奏する人の音楽性を高め、包括的な音楽性を育むような総合的学習を実践することができるのである。

当然のことながら、電子キーボードのためのオリジナル作品が演奏されることの必要性は言うまでもない。ソロ楽器として、あるいは様々なアコースティック楽器とのアンサンブルによるオリジナル作品の演奏を通して新しい響きを探求し、音楽表現の拡大に寄与することになる。

これらのことが首尾よく行われるためにも、各方面で活躍している電子キーボードの演奏家や指導者、作曲家、楽器の製作者のみならず、家庭・学校・地域社会の三つを柱とする生涯学習の指導者等も一緒に、この学会において、電子キーボードに関する幅広い理論と実践の研究、及びそれらのグローバルな情報交流を展開させていくことが望ましい。

設立後の本学会の活動は、私個人としては、次のような四つの分野の活動になると考えている。

創造的研究：電子キーボードのためのオリジナル作品や多様な楽曲の編曲

演奏研究：電子キーボードによるソロ或いはアンサンブルだけではなく、アコースティックな楽器との合奏に関する研究

教育研究：小・中・高校・大学及び生涯学習における、電子キーボードの効果的な指導法やそのための教材などに関する研究

理論研究：電子キーボードのハードやソフトなどに関する理論研究、および電子キーボードに関わる学際的な理論研究（音響学、心理学、医学、脳科学等の隣接諸科学に関連）

これらの研究は大会などで発表され、学会誌に編集されて関係方面にも発信されていくべきである。縦割り社会の日本では、学会などが横断的に開かれた活動をなかなかしにくい状況にあるが、電子キーボードによる表現だけでなく、他のアコースティックな楽器とのアンサンブルにも積極的に取り組み、音楽表現や響きなどについての新しい可能性を、他の関連学会や団体、楽器の制作者などにも発信していけるし、それがひいては音楽活動の活性化に繋がるのではなかろうか。

最後に、学会設立というたいへん有意義で重要なご示唆をくださっただけでなく、設立大会の会場もご提供くださった、昭和音楽大学の下八川理事長先生に心から感謝申しあげる。そして、ご多忙な折り、ご参加くださった皆様には、配布資料の中にある「設立大会までの経緯」をご理解くださり、第一回大会の開催に向けて、効果的な組織作りにご協力を賜ることができるようお願い申しあげる。

中国における 電子オルガン音楽の現状と課題

中国における電子オルガンの発展過程と今後の展望

上海音楽学院現代楽器音楽科主任・副教授 朱 磊
翻訳：森岡 葉（音楽ライター）

発展の過程

A)中国における電子オルガンの歴史は、1985年に日本のヤマハ音楽振興会の協力の下、中央音楽学院(北京)、上海音楽学院、天津音楽学院に「ヤマハエレクトーン講師養成コース」が設置された時に始まる。ヤマハ(株)からの楽器の提供とヤマハ音楽振興会からの講師の派遣により、養成コースの授業がスタートした。当時の中国にとって、電子楽器は全く未知の新しい事物であった。養成コースは、短期間の間に多くの教師と学生を惹き寄せ、修了生たちはその後十数年間の電子キーボードの発展を支える中堅的な力となり、中国における電子オルガン事業に不滅の貢献をした。電子キーボードは、雨後の筍のようにまたたく間に全国に普及し、シングル・キーボードの学習者は、毎年何十倍、何百倍という勢いで増加した。大都市では多くの学生が電子オルガンに興味を持ち、音楽学院の講師養成コースには受講希望者が殺到した。20世紀の最後の15年間に、電子キーボードは中国の音楽界にまたたく間に広がった。B)90年代、コンピューター音楽が全面的に中国に入ってきた。MIDI技術の応用、コンピューター音楽の発展、電子楽器の成熟が伝統音楽のすべての領域に侵入し始めた。数十人の人間を必要とした仕事が、現在では数人、甚だしい場合は一人で出来るようになり、仕事の効率を大きく向上させてコストを下げたばかりでなく、音楽を発展させるための考え方と可能性の幅を広げた。電子オルガン(三段鍵盤)は数十年間の発展の過程を経て、九十年代に成熟期を迎えた。楽器の進歩は演奏法に発展と革新をもたらした。電子オルガンのタッチ、演奏方法、音楽表現には、ますます多くの可能性が生まれ、現在、電子オルガンの演奏法は非常に多様化し、音色の変化と音楽の表現能力はますます大きくなっている。楽器の完成と演奏法の発展は、電子オルガンで思いのままに音楽を表現することを可能にした。このような“自由自在”な演奏方式は、電子オルガン演奏を“表現芸術”の学問として成り立たせるための最も重要



(写真右:朱磊氏、左:森岡氏)

な条件となったことは疑いがない。

C)電子オルガンの発展は非常な速さで中国の音楽界から注目され、とくに音楽の高等専門学校・大学が大きな関心を持った。表現芸術が可能な楽器として音楽専門大学の中に専攻学科が設けられ、体系的な学問として学ぶことができるようになったことは、歴史的な進歩であろう。現在では、全国の主要な音楽学院(中央音楽学院、上海音楽学院、天津音楽学院、瀋陽音楽学院、西安音楽学院、広州音楽学院、武漢音楽学院、四川音楽学院等)に電子オルガン専攻学科が設けられているほか、そのほとんどの音楽学院の附属中学(中学・高校)にも電子オルガン科が設けられている。これは、中国の音楽界が電子オルガンの発展と将来性に大きな自信を持っていることを証明している。毎年行われる『全国電子オルガンコンクール』の審査員には、有名音楽学院の学院長や副学院長が招かれているが、このようなことは他の楽器のコンクールではめったにないことで、いかに各音楽学院が電子オルガンを重視しているかがわかる。D)音楽学院に専攻学科が設けられたことで、中国に於ける電子オルガンの発展は新しい時代を迎えた。1.大量の専門的な人材が生まれ出された。彼らは演奏ができるだけでなく、編曲やオリジナル作品の作曲もでき、そして新しいものを開拓し創造しようとする精神を持っている。電子オルガンという生まれたばかりの専門分野にとって、このような情熱を持って努力する人材が存在することは、明るい未来を約束するものである。音楽学院での教育が、電子オルガンの発展のために必要な人的資源を提供したことは疑いがない。2.音楽学院の中での実践と活動が、社会における電子オルガンの応用のために斬新な考え方と成功例を提示した。社会における応用とは、現在普及しているあらゆる音楽活動の中で電子オルガンを活用し、その優位性を発揮するという意味である。近年、国内外の電子オルガン関係者は、コンチェルト(ピアノ、管弦楽器等)、伴奏(声楽、合唱、舞踏等)、新作初演(オーケストラ・スコアの演奏)等々、応用面で様々な努力をしている。このよう

な活動は、電子オルガンの発展領域と社会的な役割を広げると同時に、その他の学科にもより広い考え方や選択の幅を提供している。3.音楽学院とその附属中学に電子オルガンの専攻学科が開設されたことは、ピアノや電子キーボードを学んでいる多くの学生に電子オルガンを学ぶ機会を与えた。現在音楽学院で電子オルガンを学んでいる学生は、もともと電子キーボードや電子オルガンを学んでいた学生と、ピアノを学んでいて音楽学院に入ってから電子オルガンを始めた学生に分かれるが、どちらの場合も優秀な人材に成長している。これまでのコンクール入賞者の中には、ピアノを学んでいた人、電子キーボードを学んでいた人、アコーディオンを学んでいた人と様々な人がいる。これは、鍵盤楽器を弾くしっかりとした基礎と音楽的な素養さえあれば、誰でも電子オルガンが弾けるようになることを証明している。

E)以上の発展の経過を見ると、中国の電子オルガンの進歩と発展は音楽学院の参加の下で初めて実現したと言える。音楽学院が系統的な学科を開設し、専門の人材資源を養成し、専門分野の発展領域を開拓したことは、中国における電子オルガン事業の発展に大きな役割を果たした。

将来の展望

電子オルガンの未来を展望するとき、私は以下の3つの方向に向かって努力すべきだと考える。

A)実際に、音楽の各領域・学科との積極的な協力、合作を展開することが、電子オルガンの発展にとって最も重要なことであろう。様々な音楽活動の中で電子オルガンが活用されることによって、より多くの人に電子オルガンを理解させ、エレクトーンを使うことの優越性を感じてもらうことができる。社会的な認知と市場の需要があってこそ、この素晴らしい楽器の受け皿と応用範囲を広げることができる。もちろん電子オルガンがオーケストラに取って代わることはできないが、公演の環境やコスト、人員など客観的な条件に制限がある場合は、オーケストラの代わりに電子オルガンを使うことが最も良い選択であることは間違いない。この分野にはすでに多くの成功例がある。2001年上海で上演された新作オペラ『党の娘』の全幕の音楽は一台の電子オルガンによって演奏され、劇場、人員、経費等の制限から新作オペラを解放し、音楽界から高い評価を受けた。

B)電子オルガン自身が持つ特徴を生かした芸術形式と芸術作品を創造すること。これは、オーケストラの模倣や代替による社会的な活用とは全く反対の方向である。斬新な

音楽の種類、風格を生み出し、伝統音楽とは全く違う独特の音色、効果を掘り起こし、電子オルガンの特性と優位性を発揮し、伝統音楽の形式では成しえなかった領域に到達することが、電子オルガンの発展の長期的な目標である。これには、大きな創作と創造能力が必要である。そして、それなくしては電子オルガンが未来の世界の楽器の中で独立した地位を築くことはできない。

C)教育の普及の広汎な展開を推進すること。しっかりと社会的な基礎があってこそ、電子オルガン事業を健全に発展させることができる。過去十数年の間に、電子オルガンがその普及において幾つかの困難に遭遇したことは否めない。多くの要因の中で、楽器の価格が高いこと、宣伝の欠如、教師の不足が最も重要な原因である。楽器が成熟する前の段階の時期には、メーカーが絶え間なく楽器の開発を行い、モデルチェンジや開発コストにお金がかかり、楽器が高価なものになっていた。中国の多くの家庭は、この価格を見ただけで怖気づいてしまっていたが、現在では楽器が完成されて安定してきたので、開発にもそれほどコストがかからなくなり、価格も徐々に下がっている。現在、普及型の電子オルガンは数千元から1、2万元(1元を14円で換算すると1万元は14万円)くらいで買えるようになっているので、一般の家庭に電子オルガンが入るのも遠いことではないだろう。さらに重要なことは、現在中国にはシングル・キーボードを学んでいる何十万人もの子供たちがいることである。これは、中国に特殊な電子オルガンを将来学ぶ可能性のある人材的な大きな基礎で、他の国では考えられないことである。宣伝に力を入れ、多くの大都市、中都市で電子オルガンのコンサートや講座、交流活動などを行って、より多くの人に電子オルガンに触れてもらう機会を作り、学校や青少年宮など教育の現場でも電子オルガン教室を開設し、指導者養成コースを開講して電子オルガンを教えられる教師を増やさなければならない。今後音楽学院で電子オルガンを専攻した学生たちが卒業し、社会に出て電子オルガンの普及と教育をさらに積極的に推し進めていくことが期待される。

終わりに

電子オルガン演奏を一つの新しい学問として中国で発展させるには、まだまだ道のりは遠い。電子オルガンの楽器としての完成にもまだ時間が必要だが、この数十年間の楽器の機能や表現力の飛躍的な向上には目をみはるものがある。近い将来、電子オルガンが我が国の音楽事業に大きな貢献をすることは間違いないだろう。

M.L.(ミュージック・ラボラトリー)の 学校教育における可能性

埼玉県立鴻巣女子高等学校教諭 大串 和久



1 はじめに

表現活動の歌唱・器楽・創作を関連付け鑑賞活動とも結び付く総合的な学習活動として、ミュージック・ラボラトリー(=以下、M.L.)は「芸術の幅広い活動」を活発に展開できる様々な可能性を携えているとあってよい。これまでに実践されてきた熱心な研究者による貴重な発表に加え、M.L.を筆者自身が受講者として初めて体験してから指導者として活用している現在に至るまでの経験・研究の経過及び結果を交え、M.L.の学校教育における多岐にわたる可能性について論じて行きたい。

2 M.L.既設校の現状とその多岐にわたる可能性

鍵盤楽器の学習を集団活動において効率よく実施できるシステムとして30年前に誕生¹したM.L.は、機器そのものの性能が昨今飛躍的に向上している。

筆者の前任校²における普通科選択必修「芸術」の授業で実施したM.L.の活用についてふれる。

(1) 初学者から経験者まで多種多様なニーズに応えることが可能なM.L.

音楽選択者の鍵盤実技経験の実態

鍵盤実技を学ぶ同一クラスの受講者編成が、ア；体験が皆無または極少ない初学者、イ；数日程ある中級者、ウ；専門性を深めたい上級者、の如く多岐にわたる場合、施設・時間の制限の中で行き届いた個別指導が行えないという難点が挙げられる。「授業外におけるピアノ及び電子オルガンの個別レッスン経験の有無」を問うアンケート調査³によれば、ピアノは『全くの未経験』と『少しでも経験したことのある者』とが約半々、電子オルガンは9割弱が『全くの未経験』となり、M.L.既設校ではないが兵庫県内6校で実施した結果も、ほぼ同様であった⁴。このように厚い

層を成す中では、それぞれの経験度、実技レベル、達成目標にあわせた細やかな配慮が不可欠となりM.L.は以下のような効果を期待できる。

出力切り換えによる効果

各子機『ヘッドセット内』の鍵盤学習は、練習音を他者に聴かれず周囲音の干渉も無い「個室」の如く能率よく安心して学習ができる環境を提供し、後述するディスクレコーディングの作業も集中力を高めて行える。合奏や発表演奏会時は『スピーカ出力』や『外部出力』に切り替え、「個室」とは逆に、学習者本人の実演奏を披露し、それを周りが聴き入るといふ「表現」と「鑑賞」の同時展開が可能となる。

調整卓使用による効果

調整卓やカメラ・モニターの活用により限られた時間の中でも個別指導が合理的に行えるが、学習者の視線・無理な運指等は側へ行かなければ把握が難しい。時間的に不合理とはいえ個々の直ぐ隣で指導する方が的確な運指の指示や暖かさを感じるレッスン・会話が行えると信じそれを実践している。

筆者の考える調整卓の効果的な使用法はむしろ合奏機能にあると考える。初学者と中・上級者による「ペア合奏」は、生徒同志の対話を織り混ぜながら初学者の基礎鍵盤能力を向上させるとともに中・上級者の責任・信頼感を高めることになる。他のグループとは干渉せずに進度に応じて連弾(正確には2台ピアノ)させ楽しみを増幅し、さらに前後4人・8人等徐々に規模を大きくしてアンサンブルの醍醐味を満喫させ得るのは、M.L.だからこそできる効果的な器楽指導の一方法であるに相違ない。

(2) ディスクレコーディング&プレイ機能の活用による高まる学習効果

個人学習の鍵盤実技向上への効果

初学者には平易な曲目(市販及び自作⁵の両手演奏支援ソフト)を提供し、右手 左手(各々疑似両手演奏による)両手、遅 通常の数度、等学習者自身が到達レベル・進

¹ 杉江正美「M.Lシステム30年間の変遷と反省」M.L TUTTI vol.1より2003.3

² 埼玉県立鴻巣女子高校

³ 一昨年9月前任校音楽 受講生対象

⁴ 拙著修士論文資料(2004.1)より収集データを引用し経験年数区分を「未経験」「3年未満」「5年未満」「5年以上」の4区分に再

構成。なお、本報告書では誌面の関係で表を割愛した。

⁵ 右手・左手・伴奏を別トラックへ記録すると再生時に効果的な練習が可能となる。

度にに応じて調節しながら進めていく。以前、初学者に対し「片手だけ(で終了して)も可」として鍵盤に親しめることを最優先して進めてきたが、昨今は多少困難さを感じるものが憂慮されても「両手演奏」を視野に入れ、ひとつの目標にしている。これは、家庭をはじめM.L.未設置の鍵盤でも自らの両手演奏能力を身に付け楽器さえあればどこでも楽しめるようにするため、さらに脳(前頭連合野)の活性化を促す⁶ことが期待できるからである。中・上級者に対しては幅広いジャンル・レベルのソフトを用意し、ピアノ協奏曲の如くオーケストラ伴奏で演奏したり、バンド演奏をバックにソロを弾いたり等、時間を持って余すことなく楽しむことができる。

学習者自身の記録と再生による様々な活用法

毎回の演奏を各自専用のフロッピーに録音し、次回再生することで成果を確認できる。また、アンサンブル多重録音や即興演奏・創作の「メモ録音」等、多彩な活用法がある。高校生にとって、携帯電話の扱いにかけては新たな機種にも抵抗無く、PC については小学生時からの授業や家庭への普及により、所謂「メカに対する偏見」は薄らいだようにも見える。しかし、ピアノという楽器が扱いの困難な「機器」というイメージを与えないようモニタを駆使し、平易な言葉を用い、分かり易く説明することが肝要である。この他、MD レコーダーを追加することにより、弾き語りや他のアコースティック楽器との共演も記録・再生が可能となり、活用の幅は一層膨らむ。

(3) 初学者も容易に学習できる器楽・創作・鑑賞への活用法

前任校ではピアノのレッスン未経験者が約半数で5年未満(=読譜や両手演奏が困難な場合あり)の者を加えると74%に達する。鍵盤学習経験が浅くとも各々の能力を高めつつ周りとの協力により演奏会で成果を披露できるようなM.L.の活用法を考察する。

コード学習

白鍵のみ=C, Dm, Em, F, G, Am, Bm-5のうち、Bm-5以外の6コードを取りあげ基本形で平行移動することで「根音」「コードネーム」「鍵盤」との関係を徹底する。余裕があれば転回形使用により移動距離が節約できる方法(響きの変化は割愛)にも触れる。次に、C-G-Am-Em-F-C-F-Gを繰り返し、パッヘルベルのカノンが合奏できることや同じ進行で多くの曲が作られていることに触れていく。さらにC, G()またはC, F, G()のみで構成される平易な合奏曲を、旋律・和音(コード)・低音(ベース)の3パートを全員が学習したうえで小グループ(3~4名)毎に担当パートを決定、グループ内のアンサンブルを楽しむ。最初は楽譜通りの指定音色で行い、適宜グループ独自の音色を選出

しスピーカ出力にて発表する。その後コード進行に話を戻し、右手で旋律、左手でコード弾きという両手演奏へ挑戦していく。

リズム変奏とメロディー変奏

平易な曲の旋律を音程はそのままにリズムだけ変奏、あるいはリズムを変えずに旋律の音高のみの変奏を、楽譜に書き取るとともに各自専用フロッピーへ録音する。リズム変奏は初学者でも容易に扱える場合が多いので先に行い、和音感()をともなうメロディー変奏はキャッチボールを繰り返しながら丁寧に進めていく。この時、明らかに誤った音遣いのみ指摘するのみに止め、極力本人の創作意欲を活かすよう支援することが肝要である。

四七抜き音階学習と編曲・簡易創作

長音階(C dur)を五線紙上で学習するとともに、鍵盤上で全音と半音の関係を確認した後、長音階の第四音と第七音を省略した音階がどのような響きになるのかを実感させる。次に、五線紙から全く離れて黒鍵のみで全曲⁷弾ける旋律をクイズ番組の解答者感覚で探し、解答の内容を指導者が確認のうえ専用フロッピーへ逐次学習者自らが録音していく。各自数曲終えたら、それぞれの旋律に適した、(第3音省略)、²(根音省略)、(根音のみ1 oct. ユニゾン)または²(第3音省略)の和音いずれか⁸を空きトラックへ記録(多重録音)し、前記のグループ毎にグループ内発表を行う。その中から1曲に絞込みで扱った音色選出、で扱った変奏、リズムセクションの追加等を全てグループ毎に進める。さらにの楽曲のように旋律、コード、ベースの3パート(打楽器追加も可)に編曲ならびにアンサンブル練習をし、その成果を発表演奏会にて披露する。

3 今後の課題

コード学習では黒鍵の扱いや、長・短三和音の区別(増・減も同様)に一切触れていない。前々任校で実施したようなスケールの大きい創作発表演奏会へと発展させるためにも、より理解しやすい教材の作成・指導展開の構築が必要である。また、黒鍵のみによる四七抜き音階を用いた旋律に対して和音には白鍵使用可能とし同じ旋律に様々な(和音)伴奏が可能となることや、黒鍵のみの旋律を白鍵のみへ移調し再度五線紙へ意識を戻しつつコード学習で得た知識を活かしながら和音付けを行うこと等、M.L.のもつ可能性を最大限に引き出し、学習者が楽しく積極的に授業参加ができ、卒業後も未永く鍵盤に親しめる様これからも研鑽を重ねたい。(現職: 埼玉県立大宮光陵高等学校教諭)

⁶ 「ためしてガッテン; 脳イキイキ楽器入門」NHK 2003.6.11 放映
「あるある大事典2; 第1回あるある脳力テスト」フジテレビ
2004.8.15 放映

⁷ 部分的にはではなく、1曲全てが四七抜きになっている楽曲を対象とする。

⁸ 旋律により (第3音省略)が適切な時は随時教える。

小学校における 電子楽器を活用した効果的な授業

世田谷区立上北沢小学校教諭 初山 正博



私は小学校音楽科において、電子楽器と打楽器を活用して児童一人一人を生かした器楽の指導法を研究し、また、編曲による教材作成をしている。今日は、小学校における電子楽器を活用した効果的な授業というテーマを、器楽合奏という活動に焦点を当てて発表したい。

1. 初等教育における合奏活動の重要性について

(1) 今日の学校教育における重要な課題

今、教育の世界では、子供たちが自分に自信がもてない、生きていく価値が見つけられない、すなわち、『自己肯定感が持ちにくい』という事と、『人と触れ合っていこうとする力が弱まっている』の2点が精神形成上の問題として大きくクローズアップされている。この『自己肯定感をもたせる』と『他人と積極的に触れ合っていく能力を身につけさせる』の2点の改善は学校教育の大きな緊急的課題である。

(2) 解決の方法と音楽科の関わり

この事案を改善するための方法として、私たち教員は、子供たちに『価値の共有』を多く体験させることが重要な手段であると考えている。

集団でひとつの活動を追及し、価値あるものを作り上げ、その価値を共有させることで、『人と協力し、積極的に触れ合っていく力』が育つ。さらに子供たちがお互いに認め合うことで自分の価値を認識でき、『自己肯定感』を形成していけると考えるのである。

しかし、教育現場における学習形態は、算数・国語・体育などの教科や、道徳など領域の大部分において個人学習活動が主体であり、集団で協力する学習の場は少ない。集団での学習活動が主体であるのは唯一音楽科のみである。ここに、初等教育における音楽科の大きな存在価値がある。

(3) 合奏・アンサンブル活動の重要性

この『価値の共有』という課題に対する音楽科でのアプローチの方法としては、集団で「音楽的な深まり」を追求させることが一番効果的な手段であると私は考える。子供

たちが音楽活動の結果に大きな価値感と充実感を持つためには、「音楽的な深まり」が不可欠である。

さて、集団で追求する音楽科の学習活動には、斉唱・合唱・合奏・創作活動など多種のジャンルがある。歌唱の活動は取り組みやすい反面、音楽的な深まりを追求するためには児童全員の技能を一様に高めなければならない。創作活動は取り組みやすいが音楽的な深まりは追及しにくい。合奏は、パートの数が多く、個人個人の個性や特性を生かした楽器と個の力に応じた追求の方法を選択できるという点において、この「集団による音楽的な深まりの追求」という課題に対しては最も効果的であると私は考える。

以上述べたように、音楽科教育における「合奏」の活動は、教育の今日的かつ緊急の課題である『自己肯定感を育てる』『人と積極的に関わろうとする力を育てる』の2点について、「音楽の深まりの追及による価値の共有」という面からのアプローチにおいて大きな役割をもつといえよう。

2. 合奏と電子キーボードとの関わりについて

(1) 小学校における音楽科授業の特徴

小学校における音楽科の授業の特徴としては、まず、「集団で活動・追及することが中心の教科である」とことと、「全員が必修である」ことが挙げられよう。全員が必修であるために、中学・高校の選択教科と違って学習者の意欲と技能の差が大きい。

第2に年間授業時数が少ないということがある。5・6年生では年間50単位時間(1単位時間は45分間)しか授業時数がない。したがって、管楽器や弦楽器など継続したトレーニングが必要な楽器を使用することは不可能である。使用できる楽器は教育楽器や鍵盤楽器、および打楽器に限定される。

さらに、鍵盤ハーモニカ(ハーモニカ)とリコーダーは事実上必修となっており、楽器も児童一人一人が所有している。

(2) 合奏活動の特徴と問題点

一般的にみた合奏活動には、
人数的にみてソプラノリコーダーや鍵盤ハーモニカが
編成の中心である。

鉄琴や木琴、および、打楽器を多用している。

ソプラノ、アルト、テナー、バスの合奏用アコーディオン
で4声体を形成し、響きの厚みを作ろうとしている。
などが特徴として挙げられよう。

また、抱える問題点としては、

使用楽器の音域がソプラノとアルトに集中し、響きに安
定感がない。

響きの厚みと音色の多彩さが乏しい。

アコーディオンは児童にとって演奏技能の習得に負担
が大きい。

などの点が解決すべき問題として挙げられる。

(3) 電子キーボードの活用

この問題に対して、私はシンセサイザーを中心とした電
子キーボードを活用して解決する方法を追求し続けてき
た。

編成の主体をソプラノ・アルト音域であるソプラノリ
コーダーや鍵盤ハーモニカとし、鉄琴や木琴、および、打
楽器を多用することについては変わりはない。改善点は響
きの安定と音色の多彩さを電子キーボードによって、次の
ように補うことである。

まず、器楽合奏における響きの薄さの原因となっている
バス・テナー音域の不足を電子キーボードで解消する。

バスは昭和50年代中頃に鈴木楽器kkによりバス専用オ
ルガンが学校用に開発され、他社の開発販売も続き、その
使用が小学校では定着している。

テナー音域はアコーディオンを用いずに、シンセサイ
ザーのストリングスやホルン・トロンボーンなどの厚みのあ
る音色を用いる。アンプスピーカーに接続して演奏するこ
とにより1～2台でも十分な音量を確保することができる。

次に、1台の電子キーボードで和声を演奏する、あるい
は、複数の電子キーボードの組み合わせにより響きの厚み
を作りだすとともに、全ての音域で教育楽器にはない音色
を加えて音色の幅を増やし色彩感を豊かにする。また、基
本的に、児童が希望する以外はアコーディオンを使用しな
いようにしている。

教材はクラシック・ポップス・アニメ映画音楽など多岐
にわたり、それぞれの音楽の特徴を現せるように電子キー
ボードの音色と組み合わせを考えて編曲している。

[演奏映像の提示] 曲名：J・A・コーディル作曲「パン
ドのための民話」(初山正博編曲) 演奏者：新宿区立戸

塚第三小学校平成元年度6年生全員(56名)

編成：ソプラノ・アルト鍵盤ハーモニカ、グロックンシュ
ピール、鉄琴、木琴、バス木琴、シンセサイザー6台(Roland
2、KORG3、YAMAHA1)、鍵盤タイプのブレスコントロー
ラー6台とその音源を兼ねたオルガン1台(SUZUKI)、ウイ
ンドタイプのブレスコントローラー1台(YAMAHA)、ポータ
ブルキーボード2台(YAMAHA)、バスオルガン2台(SUZUKI)
ティンパニー、大太鼓、小太鼓、シンバル、タンブリン、
トライアングル。(電子楽器は計18台)

3. 電子キーボードの教育的な利点について

電子キーボードを音楽の授業で使用する利点としては、
音程・音色が安定している。

1・2年生で取り扱う鍵盤の学習の発展として、児童誰
でもが担当できる。

練習時間が少なくても演奏できる。

の3点が主なものとして挙げられる。

児童の演奏において弦や管楽器を使用した場合、音程も
音色も安定せず、音楽的な深まりの追及はほとんど出来な
いと断言して間違いのないであろう。

電子キーボードを活用した合奏は、響きや音色の豊かさ
によって、児童の深い音楽の追求を容易にし、努力に対し
て大きな成果をつかませることができる。

また、児童誰でもが担当しうる電子楽器を用いること
は、児童の表現や音楽追及に対する意欲を高めることに大
きく貢献している。これも大きな利点である。

4. 電子キーボードを活用した授業の課題について

最後に、電子キーボードを有効に活用するための課題を
2点挙げておきたい。

電子キーボードの組み合わせを生かした編曲教材が必要
である。

電子キーボードの音色の組み合わせに関する研究と周
知が必要である。

の2点である。

ハード面で見ると、小学校での電子キーボードの普及率
は高い。しかし、ソフトの面では電子楽器を生かした編曲
の楽譜は流通しておらず、また、音色の組み合わせに対す
る教員の知識も十分とはいえない。現状では電子キーボ
ードが有効に活用されているとはいいがたい状態である。

この学会で十分な研究がなされ、教育界に還元されるこ
とを期待している。(現職：世田谷区立明正小学校教諭)

研究協議 電子キーボード学会設立準備委員および参加者による研究協議

コーディネーター：阿方 俊（昭和音楽大学講師）

司会・進行：大串和久（鴻巣女子高等学校教諭） 柴田 薫（昭和音大・聖徳大講師）

阿方 俊（昭和音楽大学講師 以後“司会”）：

今後この学会でどういった課題に取り組んでいくべきかをそれぞれの立場の方々から伺いたい。今日は国際的な視野で御発言いただける方にも多くおいでいただいている。まずはミュンヘン音楽大学教授の Wolfgang Mastnak 先生をここでご紹介し、これまでお聴きになったの印象なども含めてお話しいただきたい。

Wolfgang Mastnak（ミュンヘン音楽大学教授）：

電子キーボードの可能性は幅広いものであるが、例えば演奏会での音楽と学校の音楽を結びつけるものとしても電子キーボードの役割には大いに期待できる。初山先生の発表で紹介された小学生達は、電子キーボードを使ってオーケストラ的な音の拡がりの中でアンサンブルしていた。また、音楽大学のカリキュラムにおいても、コンチェルトに電子キーボードを活用することが考えられる。

ただし電子キーボードは既成の楽器の代用にとどまらず、新しい音を生み出す可能性に目を向けるべきでもある。ストラディバリの音色を何かで置きかえるということとは不可能であるし、それは尺八、三味線その他のいろいろな民族の固有の楽器それぞれについても言えることである。電子キーボードは、既成の様々な楽器、それぞれの民族固有の楽器と融合して新しい音楽を作り上げる可能性を持っている。東アジアと西洋をつなぐ架け橋にもなるだろう。

司会：今 Mastnak 先生がおっしゃった“代用”ということの意味も踏まえつつ、国際的な話題を続ける。20 年ほど前に私が電子オルガンによるオペラ伴奏の試みに取り組み始めたばかりの頃、非常に大きなチャレンジがあった。その時演奏されたご本人である赤塚先生から直接お伺いしたい。

赤塚博美（洗足学園音楽大学講師）：

1988 年にミラノ・スカラ座の副指揮者ピザーニ氏の指揮で電子オルガンによって歌の伴奏をした際、ピザーニ氏はオーケストラの代用としての演奏ではなく、あくまでも音楽そのものとしての要求をしていた。スコアを読みながらオーケストラ的な音色を使用して演奏していても、オー

ケストラのサウンドの再現が目標ではなく、音楽をどう表現するか、オーケストラが出すニュアンスを電子オルガンを通してどうに表現するかを教えていただいた。

今後の問題点として、スコアリーディングは大切だが、スコアを見ながら演奏する形態が単なる分担奏になりつつあるのではないかと危惧している。また、オペラやコンチェルトのオーケストラ・パートを電子オルガンで演奏することに、演奏者も指揮者も慣れてきて、そのせいで本来あるべきものとは違った方向に行ってしまうのではないかと感じることも少なくない。それらを今後の課題として指摘しておきたい。

司会：1991 - 93 年にウィーンで電子オルガンのコンサートが行われた。当時ウィーン留学から帰国されたソプラノの山崎史枝先生が、今度は日本文化として、あちらにはまだない電子オルガンを交えた演奏形態を日本から発信できるものとして紹介したい、ということでご尽力下さった。演奏会に対するウィーンでの評価やわれわれ電子キーボード関係者の今後の課題などをお願いします。

山崎史枝（国立音楽大学付属高等学校講師）：

1991 年にヨーロッパ留学から帰国した後に電子オルガンと出会って一緒に演奏し始め、1993 年には母校のウィーン市立音楽院大ホールで電子オルガンを使ったコンサートを行った。学長であったミラー先生は「本校の鍵盤楽器教育だけでなく、オーケストラ、ジャズ、ダンス、オペレッタ、オペラ、作曲そのほか全ての分野に置いての近未来的な音楽教育のために、予算さえ許せば最低 20 台はこの電子オルガンを入れたい」とおっしゃった。ヨーロッパの音楽大学も日本同様体制が大きく変わりつつある今、電子楽器を日本の最先端の音楽文化としてヨーロッパを始め世界中の音楽界にアピールするチャンスではないかと思われる。

ただ、電子鍵盤楽器でオーケストラの代用をするという発想は、もう 20 世紀で終わりにして良いようにも思われる。電子オルガン奏者の演奏レベルが非常に高くなり、楽器も大いに進化した今、電子オルガンが、リアルタイムで表現できる独自のサウンドをもってアコースティック楽器やヴォーカルとアンサンブルができる時代が到来し、21

世紀の新しい日本の最先端音楽となって欲しい。そうすれば私たちオペラの世界にいるものにとっても満足度の大きい成果が上がるだろう。

司会：ここまでお話を伺ってきて、今後はオーケストラスコアに基づく演奏にあたって、いかにそこから音楽を再構築していくかという reconstruction が重要である、という認識が浮かび上がってくる。

電子オルガンの国際性を示す話題をあと数点。インドネシアから昭和音大に留学している Dewi さんは電子オルガンの国際的な組織について等いろいろ調べておられる。今日はイギリスの事情をご紹介いただける。

Dewi Puspita (インドネシア・昭和音大学生)：

エレクトーンソサエティという団体について紹介したい。これは英国の優れた電子オルガン奏者たちが、鍵盤奏法と電子オルガン独自のプログラミングの知識を後輩達に教え、若い優秀な奏者を育成するために設立されたもので、昨年11月8日にはロンドンの音楽大学で演奏会も行っている。機会があればその演奏会の模様などもお伝えしたい。

司会：イギリスでは既にヤマハの電子オルガンは売られていないが、そこで最新型の機種を用いてこうした演奏会などが行われているということは興味深い。既に一企業の動向とは別に、音楽家としての自律性のある動きがあるのではないか。同じく韓国も電子オルガンは輸入されていないが、現地での状況を田中久米子先生にお話しいただきたい。田中先生は2000年に日韓の子供1000人を集めた合唱の伴奏をエレクトーンで務められた方でもある。

田中久米子 (電子オルガン講師)：

日本人学校で教師をしている夫の転勤で、韓国のソウルへ赴いたとき、自分自身の楽しみのためにエレクトーンを持っていった。秋祭りの行事でエレクトーンを演奏する機会があったが、日本人学校の子供達ばかりでなく、現地の人も多くいらっしゃる場で演奏した。韓国では電子オルガンは販売されていないので、演奏曲はクラシックなどではなく、アニメの曲など耳馴染んだ曲を選んだが、どうしてこういう音色ができるのか、どうしてこういう演奏ができるのか、と大変驚かれ、楽器にも非常に興味を持たれた様子だった。

司会：今日は日本の音楽教科書で中国の琵琶の紹介を書かれるなどしている琵琶奏者で、電子オルガンとの共演もな

さっている劉西峰さんもおみえになっているので、ご紹介したい。

劉 西峰 (中国・西安大学副教授 琵琶奏者)：

以前にエレクトーンで私の琵琶協奏曲を演奏していただき、大変素晴らしい、ということで香港などでも再演することができた。非常に感謝している。

司会：次に教育の問題にうつりたい。教育というと主科も重要だが、副科も非常に大きな分野である。まず昭和音大の小池先生からお話しいただきたい。

小池純江 (昭和音楽大学助教授)：

昭和音楽大学では現在学部・短大合わせて95名が副科の電子オルガンを履修している。副科の学生にもなるべく演奏の機会を与えたいということで、電子オルガンの定期演奏会や、ピアノコース4年生によるピアノコンチェルトの演奏会のオーケストラパートに、電子オルガン専攻の学生だけでなく副科の学生も参加させてきた。年々副科の学生の演奏レベルも向上してきている。

電子オルガンでアンサンブルを経験することで、ピアノのソロ演奏だけではなかなか気づけないことが発見できるようだ。

- (1) ピアノという楽器をよりオーケストラ的に捉えることができるようになった
- (2) 以前より多彩な音色の変化に対する意識が拡がり、結果的に自分のピアノ演奏に反映されてよい成果を上げたなどの学生の声を聞くことができる。

本学では電子楽器とアコースティック楽器の共演を積極的にカリキュラムで実践している。今後はこうした形態を音楽の新しい形としてさらに発展させ、その成果を発表できればと思っている。

司会：次にMLについて、東京家政大学の笹井先生からお話しいただきたい。笹井先生は、全日本電子楽器教育研究会のML部会の実行委員もなさっている。

笹井邦彦 (東京家政大学助教授)：

15年ほど保育士・小学校教員の養成課程での音楽教育に携わってきた。いわゆる芸術的の追求ではなく、いかに授業で電子キーボードを効果的に活用し、2年ないし4年で音楽の初心者や未経験者の多い学生を、子供達の音楽とかわる人材として育成していけるかという分野である。

ミュージック・ラボとは、1950年代にアメリカで開発され、主に作曲系の授業で使われていた。それを、鍵盤学

習のシステムとして、たくさんの鍵盤楽器をつないで学生がお互いに勉強し合う。今後は、そうした形態を音楽教育としてどう捉え、電子キーボードがどのように活用できるのかを少しずつ整理し、検討させていただきたい。

司会：さらに保育者指導関係の分野ではどういった課題があるかを竹早教員保育士養成所の三森先生からお話しいただきたい。

三森桂子（竹早教員保育士養成所教員）：

幼稚園教諭や保育士を目指す学生のために、ピアノの授業と並行してMLを取り入れている。(1)個人レッスンと集団授業を効果的に活用して学生の技能を伸ばす (2)表現領域の授業の中にもMLシステムを活用できないかといったことを試行錯誤し、学生と共に授業を作り上げている。

今後は音楽経験の差が大きい学生たちの集団での演奏活動に有効な教材の研究が必要である。ひとりで戦うしかない個人レッスンに比べるとアンサンブルの授業は楽しめる、という学生も少なくない。その楽しさが意欲に結びつけば力を伸ばせる。そのために、学生に合った教材を豊富に用意したい。そうした教材開発の場としてこの学会に期待したいし、また、自分自身もその活動に参加させていただきたい。

司会：昭和音楽大学ではML研究会を立ち上げて活動を始めている。同大の森先生からご紹介いただきたい。

森 直紀（昭和音楽大学助教授）：

昭和音楽大学ではML研究会を発足させた。ピアノの先生10名が参加して年間20回ほど研究会を開いている。皆電子楽器についての知識もないので、外部から専門の先生を招いて使用法や活用法を学んでいる。

キーボードハーモニーや即興演奏、アンサンブルの経験といった、個人レッスンではカバーしきれない領域の能力も身につけた学生が教育の場に出れば、そういった要素を積極的に授業に取り入れることができ、日頃のレッスンや授業の中で幼少のうちからそういうことを身につけた音楽家が育つという理想的な状況を生む下地にもなる。

大学としてもこういった人材を育てることが社会から求められているという認識で、就職や演奏、研究などにこういった資質を役立てられる学生を育てていきたい。そのためにML教室を効果的に活用し、能率的で楽しい授業を展開したい。

司会：学校教育者の立場から、実践者として最先端の活動もなさっている仁田先生からお話しいただきたい。韓国で開催されたISMEの発表、音楽研究所の主宰、そしてご本業は学校の教員と、多彩なご活躍である。

仁田悦朗（i-moa音楽研究所主宰）：

音楽というとステージに向かう音楽をイメージしがちだが、ステージで発表するわけではないが、その場でもって友人と共有し、楽しむ“場の音楽”といったものもある。生涯学習社会と言われる今、多くの人にいくつになっても音楽に働きかけ、楽しめる自由を見いだしてもらうためには、小・中学校での音楽の授業のあり方が大切になってくる。

学校での音楽は表現と鑑賞を一体になって総合的に学んでいく科目だと私は考えているが、我々は果たして表現についてを学んでいるのだろうか。教えられたとおりに再生再認して終わっているのではないか？表現あるいは創造、音や音楽について学ぶチャンスを作ってくれるものとして電子キーボードが活用できるように思われる。

電子キーボードのこういった属性が子供達の創造性・主体性を引き出しているののかは、自分としても未整理である。ただ、実際に子供達と音楽活動をしてみて肌で感じるものはある。そういったものも本学会で取り上げていって頂ければ幸いである。

司会：他にもユニークなご意見、貴重なお話を伺える人が今日は多くいらっしゃるが、時間の関係で、また学会の折りにじっくりうかがえればと思う。中村先生からまとめのお言葉を頂戴したい。

中村 誠（浜松学芸高等学校校長）：

本学会がどういうものであるべきかを考えるにあたり、吉田先生が基調報告で脳生理学まで引き合いに出されてお話しされ、また、高萩先生も音響学なども視野に入れた学際的研究の必要性を説かれた。作曲、演奏の追究と並んで学術的研究の分野が充実して初めて、公に訴えることができるだろう。

また、オペラなどのオーケストラ伴奏を電子オルガンで、という地域社会の需要に応えていくためには、大学などでも電子オルガンのための伴奏法の授業が必要だろうと考えられる。また、スコア・リーディングも大切な一方で、オペラなどのスコアを電子オルガン用に編曲した譜面が入手しやすい形であれば、大変有り難い。一部のピアノコンチェルトのスコアなどは電子オルガン用に編曲され

たものを全日本電子楽器教育研究会で一般の利用に供しているが、そうした分野での環境整備もこの学会に期待したい。

司会：演奏や新しい作品という面にも深く関わっておられる出田先生からも一言頂戴したい。

出田敬三（平成音楽大学学長）：

電子キーボードは、幼児教育、専門的な音楽教育、生涯教育と、音楽教育の面だけとっても非常に幅広い領域をカバーしている。さらに学問的な研究、社会との関わり等、大きく広げて行かなくてはならない。興味ある実践、演奏、創作、研究を互いに刺激しあい、作り上げていきたい。

司会：本日は司会の手際も悪く、まとまりがなかったが、今後のいろいろな課題を出していただいたということで、これから学会でさらに論点を深めていっていただきたい。

（文責：森松慶子）



[編集より：当日、限られた時間内での協議であったため、参加者全体に渡る意見を聞くことができなかった。後日、代表として以下の方々からご投稿いただいた。]

湯川啓子（河合楽器製作所音楽教育室 教育研究担当）

電子キーボードに携わるさまざまな立場の人が一堂に会して研究発表や討議をする場ができたことは、大変意義のあることと思います。本会の設立にお力を注いでくださった皆様に御礼申し上げます。

電子楽器は急速な進歩をとげましたが、逆に楽器としての存在意義が薄れたり、誰でも気軽に楽しめる楽器ではなくなってきているところもあると思います。吉田先生と高萩先生のご意見や提言は、まさにこうした状況を踏まえ、本学会の使命を言い当てていらしていると感じいました。今後は、それぞれ専門的な見地から、楽器、演奏、教育などについての研究や試みなどを互いに発表し、メーカーの枠を越えて、自由に活発な討議が交わされていくことを期待します。電子キーボードの将来が明るいものとなるよう、学会としての役割を果たしていかなければと痛感しました。

鈴木裕久（鈴木音楽産業 出版部）

一般分野における活用だけでなく、教育現場における電子キーボードの活用について考えていただきたい。

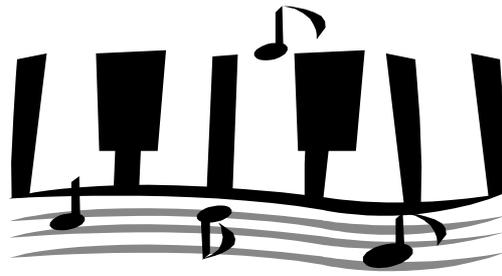
初山先生の研究発表にもあったように、子供たちではオリジナルの楽器（管楽器等）を演奏するのは技術・時間的に困難である。そのような場合に、電子キーボードが大活躍する。合奏における、キーボードの音量、楽器の配置場所、周辺機器（PA 装置等）、教科書掲載曲において効果的に電子キーボードが使用できる合奏集等、学会であるからこそ、一般分野だけでなく、子供たちへ電子キーボードを通じての音楽の素晴らしさを伝えていくような方向で進んでいただきたい。

大村泰之（ローランド芸術文化振興財団 専務理事）

ローランドの電子オルガン「ミュージック・アトリエ」は、よりリアルなサウンドを追求しているが、それは「生楽器演奏の再現」を最大の目的としているのではなく、あくまでより音楽性の高い演奏を実現するための条件の一つとして考えている。また、シーケンサーの使用は最小限にとどめ、リアルタイムでの人間味あふれる、人間の呼吸の感じられる演奏表現を追求している。シーケンサーの使用は、むしろ幼児期での教育的な使用と、中高年齢層に対するイーゼープレイの補助としての機能と位置づけている。

また、電子オルガンをはじめとする電子楽器は、いまや「生楽器の代用品」ではなく、ひとつの「楽器」としての地位を確保しつつあると言っても過言ではなからう。電子楽器だからこそなし得る音楽の世界、演奏表現があるはずである。そういう意味でも、今後は現代クラシック音楽の中にも著名作曲家による電子楽器のために書き下ろしたソロ曲、アンサンブル曲、そしてコンチェルト等の楽曲が数多く増えていくことを願ってやまない。

いっぽうで、電子オルガン奏者には、オーケストラにおける『コンダクター』レベルに近い音楽性、各楽器群に対する深い造詣が必要とされてくる。音質がリアルになればなるほど、その表現やタッチ、発音ニュアンスに高いレベルのものが要求されてくるのは必至である。にもかかわらず、まだまだ指導者やプレイヤーにその知識が追いついていないのが現状であり、今後はその種のセミナーや研鑽の機会をできる限り多く設けていくことが重要と考えている。



編集後記

この半年というもの、「電子キーボード」に特化した学会のあり方について、設立準備委員の間で議論が交わされてきた。一口に「電子キーボード」と言っても、その捉え方は人によって様々であり、学会としての取り組みは極めて広範なものにならざるを得ない。その分野には、表現、教育、理論に加え、ハード、音響、脳科学など様々な関連領域が含まれる。それが故に、この学会が全ての立場に開かれた、形式的に平等主義を強調するものになればなるほど、それぞれの立場が互いに相殺し合い、学会としての主張が曖昧になってしまう危険性も無きにしもあらずといえる。ここではよりボーダーレス的・包括的研究が求められるのではなかろうか。

電子キーボードが、最新の技術によって生み出された、多様な可能性を持つものであるからこそ、私たちはそうした可能性をむしろ厳しく吟味しなければならない。「何でもできる」からこそ、「何をして良く」「何をしてはいけない」のか、より深く研究していかなければならない。便利な利器に利用されるのでなく、確たる規範を持って善用できてこそ、「電子キーボード」の未来があると言うべきであろう。それを見極め、世間にモデルプランを示していく・・・この学会は極めて困難で重い責務を背負ってスタートしようとしている。この「報告書」がそんな学会の胎動の息吹を少しでも感じさせたなら幸いである。

(日本電子キーボード学会編集委員 野口剛夫)

日本電子キーボード学会設立大会 「報告書」

発行日 2005年5月31日
編集・発行 日本電子キーボード学会
編集委員 野口剛夫 森松慶子
印刷所 イゲタ印刷株式会社
事務局 〒215-0004 神奈川県川崎市麻生区万福寺 1-16-6
昭和音楽芸術学院内
Tel : 044-953-6606 Fax : 044-953-6580